

三戸式における諸問題 1

川 島 裕 毅

はじめに

赤星直忠氏が三戸式土器について『考古学』で発表（赤星1936）されてから90年近くが経過し、現在まで様々な細分や他形式との関連が述べられてきた。研究史については他の論考で記載されているので、ここでは省略するが、現在においても結論が出ていない三戸式の成立経緯と細分についてだけ触れておきたい。

1. 三戸式の成立と細分

まず、成立過程における対立については、東北起源説、関東起源説の2つの対立軸がある。日計式に成立過程を求める東北起源説は林氏、恩田氏、石橋氏、西川氏が唱えており、関東起源説は岡本勇氏、岡本東三氏、領塚氏、原田氏が唱えている。また、三戸式の細分編年案についても諸氏により異なっており、解決を得ていない状況にある。

対立論の詳細については、中野拓大氏の論考にわかりやすく記載されている（中野1996）。そこで、本論ではまず成立について、それぞれの主張を簡潔に記載していきたいと思う。

2. 三戸式成立

①東北起源説

西川博孝氏→日計式（図1 西川1980）

正確には東北地方の日計式を代表とする押型文と述べている。押型文の口唇部に指頭状圧痕ないしは刻み目が施され、押型文と平行沈線が組み合わさった口縁部文様も、三戸式の格子状文にきわめて似ていること。押型文土器は花輪台式及びその直後平行することから押型文が三戸式の起源であるとしている。

高橋誠氏→日計式（日計式の影響を受け生じた竹之内式）（図2 高橋1986）

高橋氏は貝殻沈線文土器の流れの中で、平坂系無文土器、中でも擦痕文土器をキャンパスに日計式のモチーフを描いた竹ノ内式が三戸式に先立つIa段階であるとしている。また、竹ノ内式土器は日計式のモチーフ基調である菱型文を変形させた変形菱型文を採用しており、両者の関連性の強さを指摘している。

石橋宏克氏→日計式（日計式の影響を受け生じた竹之内式）

関東地方の撚糸終末期である擦痕文土器の特徴、「口縁部外そぎ状で、その直下数cmをナデによる横位整形、それ以下を擦痕が走り、その擦痕により胎土の長石・石英粒子の移動が顕著である。」という特徴は、そのまま竹之内式の特徴に当てはまり、異なる点は文様の有無のみとしている。よって擦痕文土器から、文様帯の重畳と幾何学文という要素を持つ日計式の影響を受けた竹之内式が生じたと論じている。

恩田勇氏→大新式（大新町式）・竹之内式（図3 恩田1991）

恩田氏は2系統論を唱えている（恩田1991）。東北北部A系統は、尖底からあまり口径を変えず、ゆるやかに内湾する器形に、棒状工具による刻みや鋸歯状の刻みにより口縁部に狭いⅠ文様帯、その下にⅡ文様帯を、それを重畳するか、Ⅱ文様帯のみの大新式（恩田氏は大新町式）を祖型としている。胎土に繊維の混和が認められ、この点で南東北以南の沈線紋土器とは一線を画す。東北南部のB系統は、石橋氏、原田氏と同じく平坂式のキャンパスに日計式と同じ施文帯、モチーフで沈線文化した竹之内式を祖型としている。

②関東起源説

岡本東三氏→竹之内式（木の根式）（図4 岡本1992）

木の根遺跡出土土器を分類し、A. 縦位に施文し、従来の撚糸文規範に則している。撚糸が沈線に置き換わる土器が出現。B. 口縁部に無紋帯を持ち、施文方向が縦位、横位、斜位と多様で、縄文、縄文+沈線、沈線のみで施文される。C. 矢羽根状の縄文、沈線、押型文を施した土器D. 口縁部無文帯を2条で区画し、その下に2条の三角文をそれぞれ撚糸圧痕、沈線、押型で施文する。E. 口縁部に縄文圧痕や絡条帯圧痕で無文帯をつくり、その下を縄文、絡条帯圧痕、絡条帯条痕で縦位や斜位の施文攻勢を持つ。撚糸と羽状縄文、細沈線と格子文で施文された土器を含む。F. 撚糸や沈線で格子目文を作る土器。押型を縦位と斜位に交差

三戸式 東北起源説

図 1 西川氏論



図 2 高橋氏論

	関 東	東北南部	東 北 北 部
I a	竹之内←		日計
I b	三戸 ←	大平 ←	大新町
II	田戸下層 →	(+)	蛇王洞Ⅱ 白浜・小船渡平
III	田戸上層 →	明神裏Ⅲ (+) 常世	千歳物見台 寺の沢
IV	子母口 ←	大寺 ←	吹切沢

図 3 恩田氏論

	東北北部	東北南部	関 東
第 1 段 階	「大新町（古段階）」	竹之内式	
第 2 段 階	「大新町（中段階）」	大平式（古段階）	三戸式（古段階）
第 3 段 階	「大新町（新段階）」	大平式（新段階）	三戸式（新段階）

三戸式 関東起源説

図4 岡本氏論

中部	三戸式	関東						紋様				口縁部	東	北
信濃	細分	相模	武蔵	上・下総	上野	下野	常盤	横帯紋	擦痕紋	太沈線	貝殻紋	丸・角・内	南部	北部
樋沢2	三戸1	内原 山居	大原・稲荷原 はけうえ ・根ノ上	辺田山谷 池上りI	八木沢 普門寺	大谷寺 坂田	伏見 五平	○	○			○○	竹之内	日計(+)
樋沢3	三戸2		多摩ニュータ ウンNo.207	今郎カチ内 タルカ作		飯岡		○	○	○		○○○		日計(+)
細久保	三戸3	三戸 荏田10	向原 比宿西	庚塚・舟塚原 笹子込山	(+)	(+)	奥山下根	○		○	○	○○○	大平	大新町

図5 領塚氏論

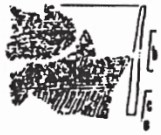
竹之内式土器	 茨城県伏見	 福島県竹之内	 茨城県伏見
三戸Ⅰ式土器	 千葉県新東京国際空港No.7	 東京都多摩ニュータウンNo.207	 千葉県タルカ作
三戸Ⅱ式土器	 岩手県大新町	 千葉県西の台	 神奈川県荏田第10
田戸下層Ⅱ式土器	 埼玉県三角穴洞窟	 埼玉県梅所	 茨城県絹塚原

図6 中野氏論



図7 原田氏編年

様式	(南関東)	(関東中央部)	(東関東)	異系統の土器	押型文
1		井 草 I (古) (中) (新)			
2	大 丸 (古) (新)		井 草 II (古) (新)		
3		夏 島 (古) (新)			(?)
4		稲 荷 台 (古) (新)			(+)
5		(成瀬西第6類等) 稲荷原 a 稲荷原 b	花輪台 a	在地化した押型文土器	(+)
	大浦山(古) 大浦山(新)	東山 a 東山 b 東山 c	花輪台 b 花輪台 c 花輪台 d		(+)
	平坂 a 平坂 b 平坂 c				沢・樋沢
				日計式 凹線文	

図8 木の根式編年案

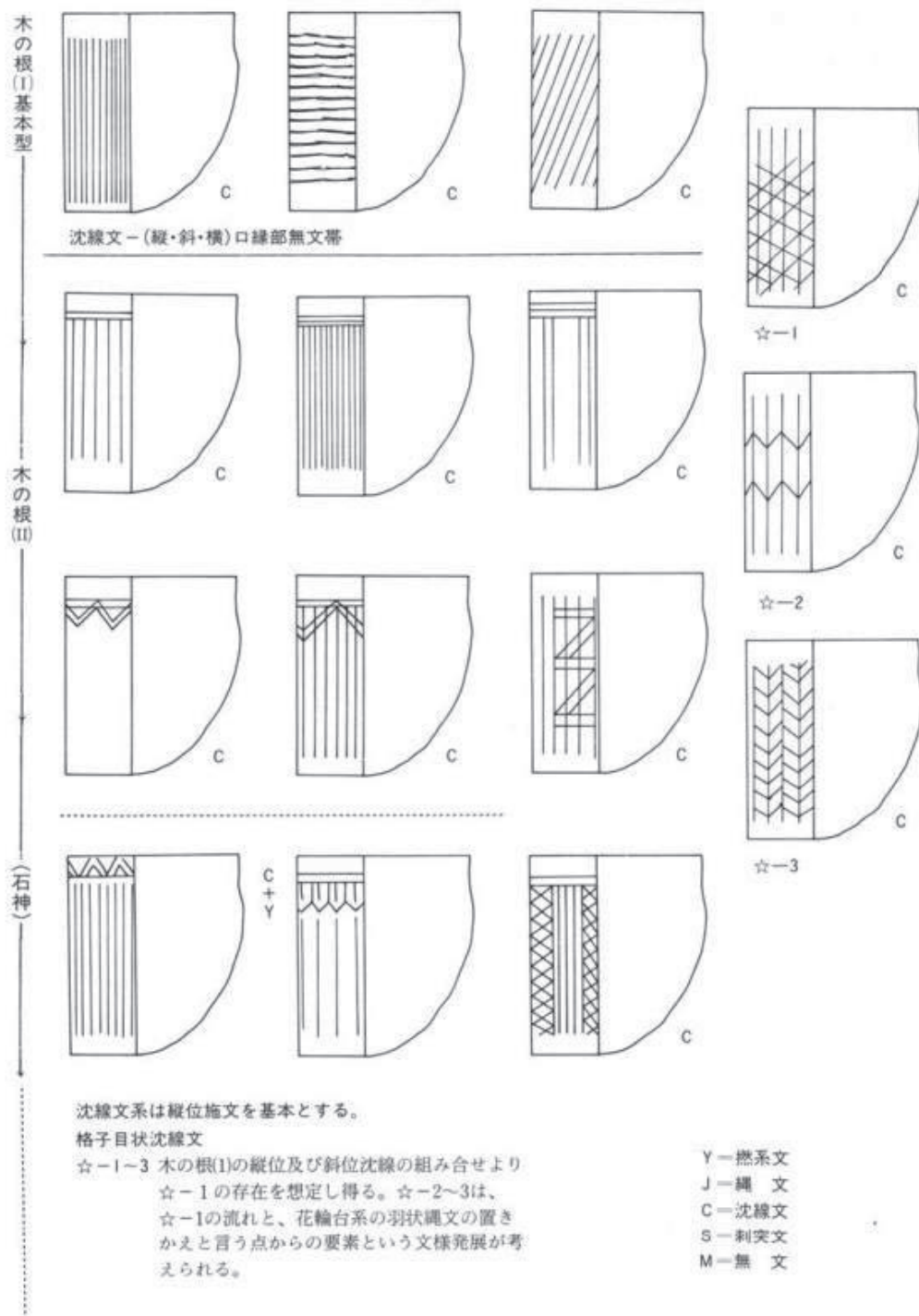
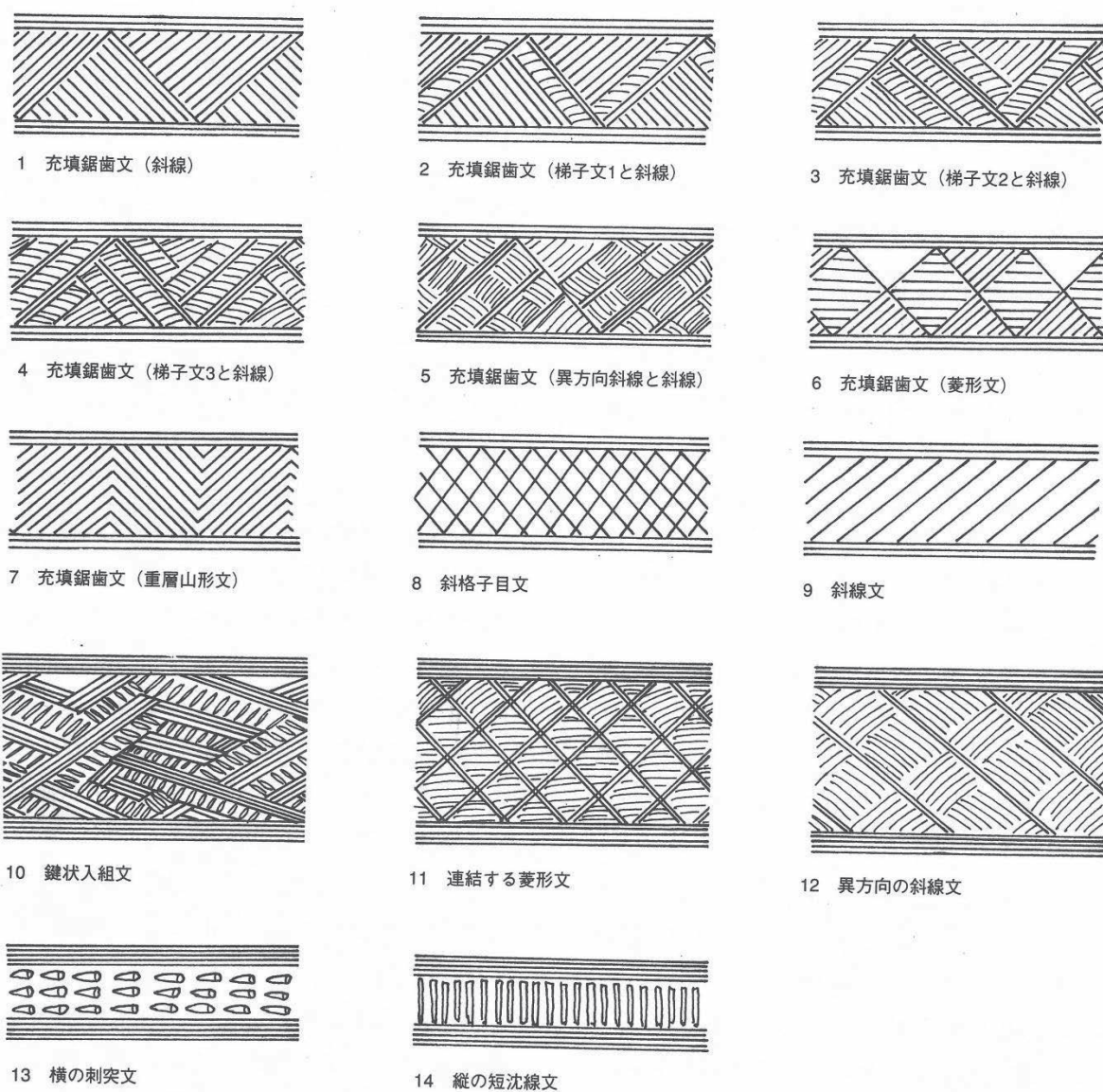
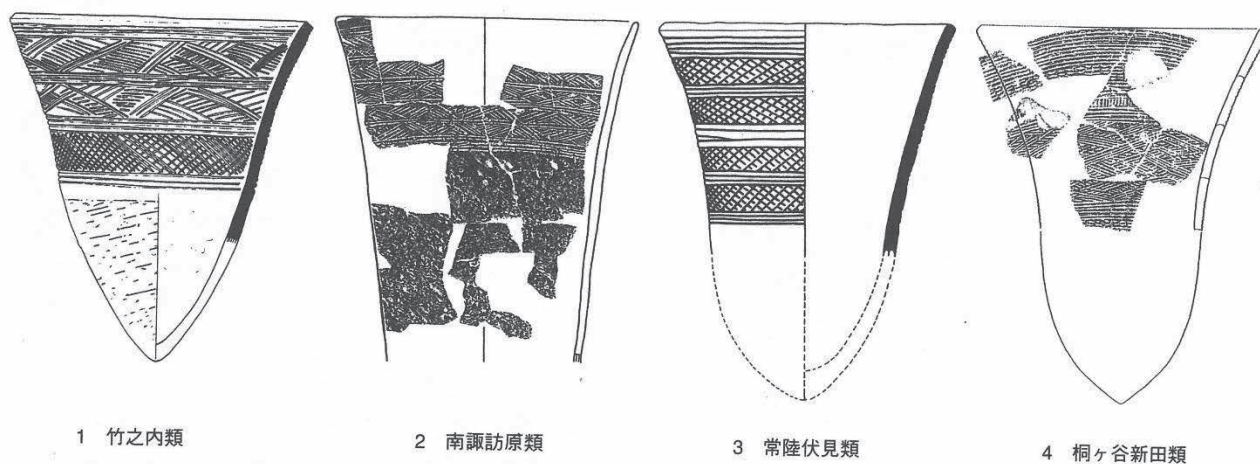


図9 竹之内式4分類と文様模式図



させる土器を含む。以上のように撚糸文末期から沈線文への流れをA→Fで提示し、それぞれのグループが撚糸文の器形に、撚糸文の規範に即して道具を変えただけであると述べている。したがって、撚糸文土器から沈線文は派生すると論じている。なお、竹之内式は三戸Ⅰ式に含まれるとしている。

領塚正浩氏→竹之内式（図5 領塚1987）

福島県竹之内遺跡で出土し、馬目順一氏により竹之内式が提唱された（馬目1982）。領塚氏は竹之内式の数段にわたる区画文が三戸式の源流であるとしている（領塚1987）。また、日計式については岩手県大新町遺跡出土の三戸Ⅱ式が日計式押型文と伴うことから、両者は平衡関係にあるとして日計式起源説を否定している。出自は木の根式・金堀式・石神式としている。

③複数起源説

中野拓大氏→日計式・平坂式（図6）

新たに加わったのが複数起源論である（中野1995）。中野氏は、そもそもどちらかに起源があるのではなく、関東地方由来のものもあれば東北地方由来のものもあると唱えている。三戸式の分布が両地方に重なることも説を裏付けるとしている。

3. 三戸式成立の問題点

三戸式成立過程において、各氏の論考内では三戸式に含めるか否かは別にして、竹之内式が沈線文土器としては始まりであるとする考えは共通しているように思われる。要は竹之内式がどこから派生したのかのルートや段階の考え方が論争となっている。竹之内式について触れると、竹之内遺跡の調査により擦痕文土器、樋沢式押型文土器と共に出土した多段の文様構成を持ち、細沈線で施文された土器が三戸式よりも古い段階であり、擦痕文土器と同じ土器製作技法であること、名称として竹之内式が示された。竹之内式成立後は、前述のように日計式から文様モチーフを取り入れ、沈線文に置き換えたとする説が提示される一方、木の根式からの変遷で成立したとする説がそれぞれ唱えられている。沈線文の萌芽は、日計式押型文と伴出する沈線を有する土器、木の根式で見られる沈線が施された土器の両方に見ることはできる。木の根式については、その後千葉県内の特に印旛沼周辺に多く事例が報告されている。さらに、木の根式以外にも関東では横浜市西ノ谷貝塚J29号住居跡から格子状の細沈線が施された土器が撚糸文最終段階で出土している。このよ

うに沈線文の萌芽は各地にある。木の根式に源流を唱える岡本氏は、「日計式との交流の中で文様モチーフが取り入れられた」としており、日計式の影響があることは認めている。つまるところ日計式から派生したかどうかが対立の問題点であり、ここに決着点を得ないことになる。日計式が沈線文土器と時期的に並行であるか否かの点において、東北の遺跡の層位より比較した相原淳一氏の論考がある（相原2020）。しかし、氏の集成の結果は三戸式、竹之内式、日計式が共伴は一つとして出土していないとしている。東北地域で共伴がない3形式の土器については一つの結果ではないかと思われる。日計式、竹之内式、三戸式のそれぞれの時期に差があることを示しているのではないか。この論考では、注意喚起として日計式は繊維土器であり、繊維土器以外の日計式としているものは模倣や、後に伝わっていく可能性を考えなければならないとしている。日計式としている土器の再考を投げかけている。

岡本氏は沈線文土器に先行する早期無文土器についても形式としては否定的な見解を示している（岡本2017）。撚糸文終末期に無文土器が増加することは認めながら、「しかし、無紋土器（原文まま）のみを抽出し、型式設定は可能であろうか。パートナーとしての有紋土器があるはずである。平坂式や天矢場式の無紋土器は初期沈線紋土器（三戸Ⅰ式）と共伴する例も認められる。」と述べ、無文土器の形式設定自体を否定している。その事例として横須賀市内原遺跡を挙げ、「内原遺跡の平坂式には三戸Ⅰ式の沈線文と、押型文が伴っている。とするならば、大浦山Ⅰ式（有紋）→大浦山Ⅱ式（無紋）→平坂貝塚の平坂式（無紋）→内原遺跡の平坂式（無紋）の三段階に無紋土器は細分することになる。」と述べている。領塚氏も竹之内式からの沈線文の流れの一方で、平坂式との関連性を触れていないのは沈線文の変遷を追うことを主眼として、「文様帯の変遷を含めて前後の土器型式との関連性を追求していく」ためと推察される。ここで無文土器について触れておくと、原田昌幸氏による細分がなされ（図7 原田1980）、近年新たに天矢場式が設定されている。原田氏の細分によると、地域性で分け稲荷原式、東山式、大浦山式、花輪台式、平坂式であり、新たに加わった天矢場式を含め6つの土器型式が存在することになる。原田昌幸氏は撚糸文終末期に西関東に花輪台式、東関東に東山式が沈線文手法を取り入れ、両者の後継として平坂式を設定している。無文土器の分類として記載したが、厳密に無文土器としての形式は平

图 10 中村氏竹之内式編年案

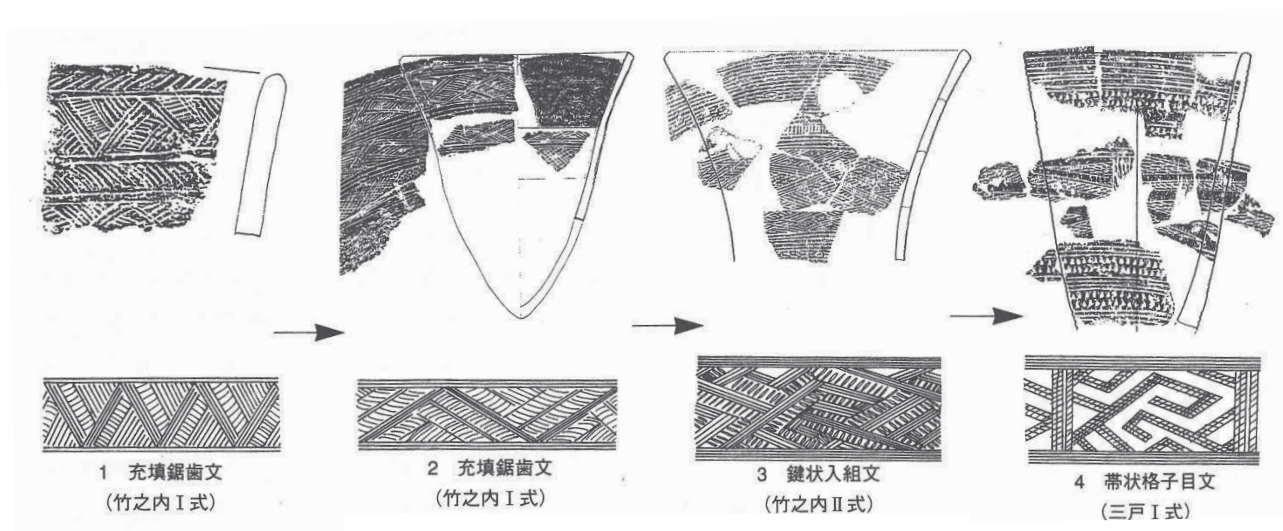


图 11 稻荷原式・花輪台式

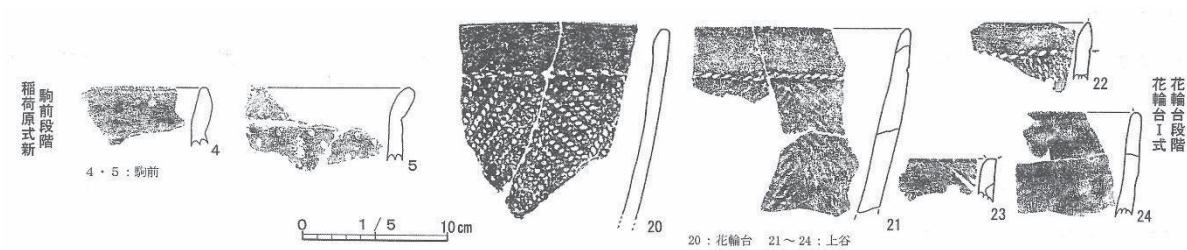
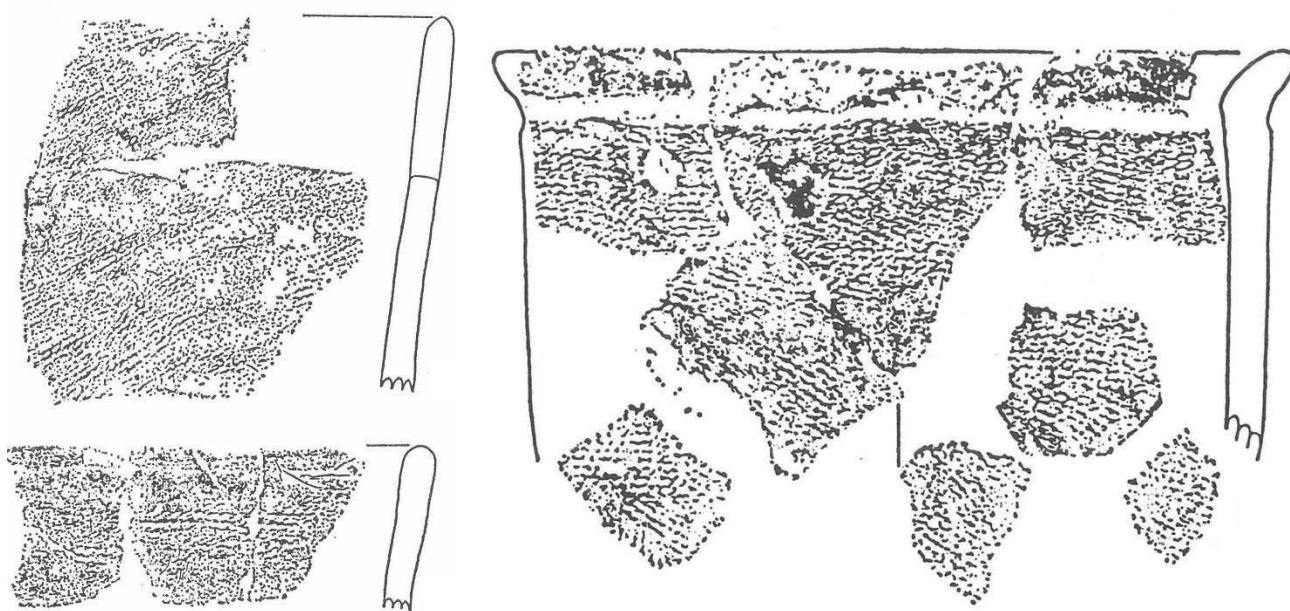


图 12 大浦山式



坂式、天矢場式のみで、それ以外の形式は沈線、撚糸、縄文等が施されている土器を含んでおり、無文土器の分類は2形式のみといえる。池田氏はその花輪台式の沈線文タイプに木の根式を設定し、沈線文の初期型式とした(図8 池田1984)。木の根式は撚糸文の最終段階に現れた土器であり、撚糸文は繊維を含む土器ではない。しかし、平坂式は繊維を含んだ土器であり、ここで胎土において撚糸文土器とは大きく隔たりがある。これについて中野氏は日計式から繊維を含む製法を取り入れたとしており、日計式が繊維土器であることは前述の相原氏の指摘のとおりである。このような繊維を含んだ平坂式土器は福島県においても広がりがあり、福島県からは関東地方からの影響とされている。

さて、東北・関東起源説それぞれルーツの違いは異なるが、前述のとおり大きく竹之内式が三戸式の源流であることに差異はない。では、竹之内式の特徴からどのような系統がうかがうことができるのか。そもそもの定義を確認してみる。竹之内式は馬目氏が提唱して以来、千葉市芳賀輪遺跡出土土器を交え分類を行った田中氏の論考があるが、田中氏は稲荷原型三戸式として分類している。高橋氏は変形菱型文として竹之内式をとらえているが、あくまでいくつかある文様の一面を述べている。その後前述の岡本氏の論考により木の根式に由来し、日計式との交流により成立すると論じ、三戸I式であると設定している。次いで竹之内式を集成し、文様別に分類し編年の設定を試みた中村信博氏の論がある(図9・10 中村1999)。ここで多段の文様構成を分解し、文様要素を14に分類している。文様以外の要素として(1)器形(2)胎土・焼成(3)色調(4)製作・整形技法(5)分布の特徴を述べており、竹之内式とはどのような土器であるかを明確に表している。要約すると口唇部が角頭状か外ソギ、一部丸頭状を呈し、口縁部が外反する朝顔形で、頸部がややくびれる平縁で、底はあまり尖らない鋭角な尖底土器である。胎土は砂や石英粒子が多くざらついており、焼成は良好で、施文部分のみ丁寧な磨きが、それ以外は擦痕が残る。中村氏は竹之内式を4類型に分類している。中村氏の1999年時点での集成では、竹之内式は83遺跡で出土しており、分布範囲を見ると千葉県内で24遺跡と最も多く、続いて福島県13遺跡、茨城県で11遺跡であり、集中して分布しているのは福島県から関東にかけての一帯であることがわかる。福島県、茨城県と接する栃木県内でも10遺跡で、北関東でも離れた群馬県では4遺跡と少なくなる。この東側

に栃木を加えた出土遺跡数は58遺跡で、神奈川県6遺跡、東京都5遺跡と西関東の出土数は少ない。筆者は今回千葉県内で新たに竹之内式が出土している事例を加えられたが、神奈川県内の出土事例を管見することはできなかった。ここで問題となるのは、竹之内式を三戸I式とする岡本・中野両氏の考えである。竹之内式を三戸I式と設定するのであれば、三戸I式の分布に偏りが生じていることになる。II式になると偏りが解消されるのだろうか。そもそも、この傾向を見ると竹之内式が関東全体の編年としてよいのかとも思う。発生し、中心地となったのが南東北から東関東であることが一致した見解であろうと考える。それが一部西関東に伝わったとして、全体の形式とすべきなのだろうか。竹之内式は東関東の土器形式とすべきと考える。中村氏は論考において竹之内式をI式とII式に分類している。I式は文様施文帯幅を均一に規制し、同じ施文幅で多段に構成され、文様内容も均一である。施文の沈線が当初は細いものを用い2～3段の文様構成が、次第に沈線が太くなり、施文幅が広がり、より構成が3段以上の多段となっていく。II式になると文様の均一化が崩れ上下に文様幅が広がり、充填鋸歯文は梯子文が鍵状や雷状に連結する変化を見せる。徐々に集合沈線化していき三戸I式の基礎となるのが竹之内II式であるとしている。このII式の分布域はI式よりぐっと狭まり常総台地周辺に多く見られるため、ここで出土範囲がより限定されている。

以上のように竹ノ内式の分布域を見ると、関東の形式としての三戸式に含めることは無理があると考え。竹之内式が福島から東関東で派生し、それが関東の三戸式誕生に影響を与えたとする大方の説を支持したい。三戸式の成立過程として竹之内式についてふれてきたが、その成立過程が三戸式の成立過程とイコールになっている。高橋氏は平坂式のキャンパスに沈線文を描いた土器が竹之内式であると見解を示した。他にも同様な見解を示している研究者の多くは平坂式の胎土・調整との共通点を指摘している。加えて竹之内式の特徴の中にはもう一つ先述したように中野氏が示した器形があげられるが、撚糸文最終末期の土器群、あるいは祖型といわれる日計式土器の器形と比較してみる。まず撚糸文系土器、あるいはその後継である木の根式の器形は口縁部への立ち上がりやくびれ等の特徴で隔たりがある。口縁部に特徴がある花輪台式(図11 原田1988)、あるいは東山式(図13 原田1986)、稲荷原型と呼ばれる土器(図11 原田1988)についても異

図 13 東山式 (原田1986)

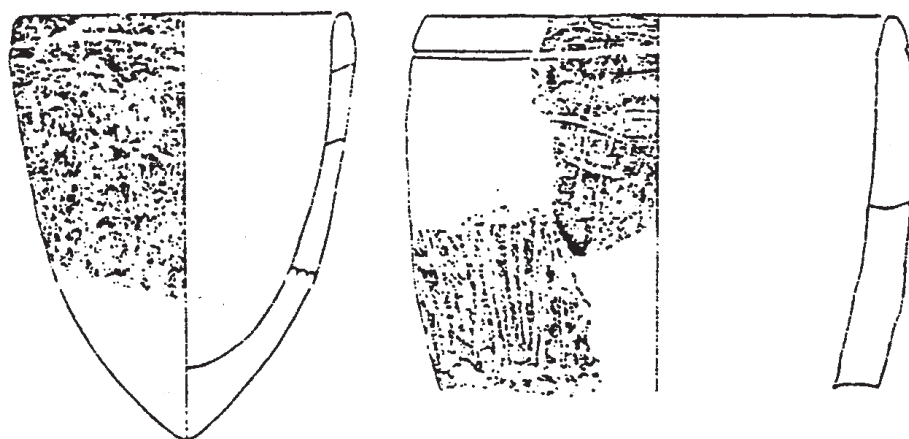


図 14 平坂式 (原田1990)

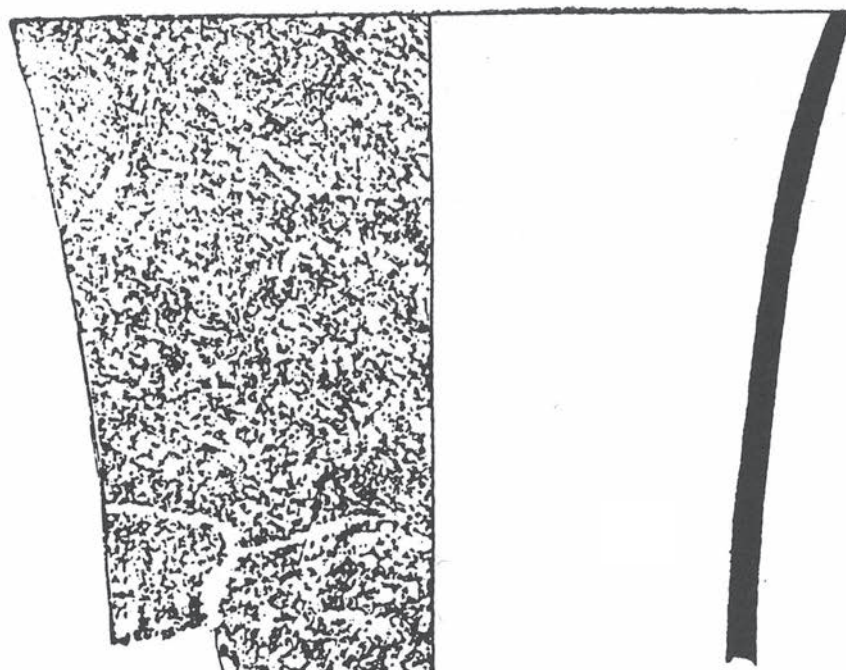
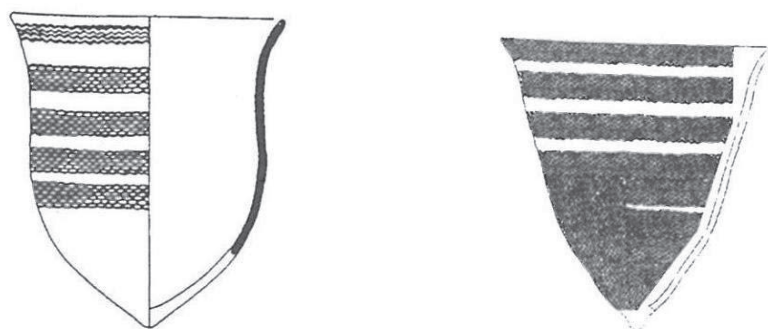


図 15 立野式・樋沢式 (岡本2017)



なる器形を呈している。大浦山式についても（図14 原田1990）、口縁部が直立、ないしは口縁部のみ外反する形状は竹之内式の器形とは異なる。平坂式を見ると、口縁部に向かって緩やかに開く形状を呈しているものもあるが、くびれ等の特徴は有さない。竹之内遺跡出土の平坂式土器は竹ノ内式と同じ器形を呈するが、同時期に作られた可能性があるため例外とする。次に押型文である樋沢式と立野式（図15）に注目してみる。岡本東三氏は樋沢Ⅰ式を立野式より前の形式としているが、川崎保氏は立野式を樋沢式より前の形式として設定している（川崎2003）。樋沢式・立野式の器形を見ると口縁部に向かって開く朝顔形に近く、頸部にくびれも有する。竹之内式の器形に近い形状を呈している。日計式を見てみると、竹之内式に近い時期、あるいは竹之内遺跡から見つかっているものを除くと、近い器形にはない。樋沢式、立野式のどちらが先行するのか、あるいは竹之内式との前後関係も判然としないが、あくまでも器形の面で見ると中部押型文土器が一番近いように見える。

おわりに

以上三戸式成立における諸問題にふれていったが、三戸式成立論争の中で1992年房総風土記の丘で三戸式成立過程の一致を試みがなされた、「縄文早期沈線文系土器の成立と展開」シンポジウムでは、高橋誠、斎藤弘道、岡本東三各氏による提示がなされた。また、高橋誠氏等により三戸式の分類により、三戸式にはいくつかのバリエーションがあることが指摘されている。最近では標識遺跡である三戸遺跡の発掘報告書が刊行され、三戸遺跡の土器の全貌が明らかにされた。本稿でふれてきた三戸式成立は全て細沈線文土器の成立過程における問題であり、引き続き太沈線文土器について述べていきたい。

（参考文献）

- 赤星直忠 1936「古式土器の一形式としての三戸式土器について」『考古学』第7巻 第9号
- 西川 博孝 1980「三戸式土器の研究－千葉県舟塚原古墳封土出土土器を中心として－」『古代探叢』
- 馬目 順一 1982『竹之内遺跡』
- 池田 大介 1983「北総台地における沈線文土器群の出現－木の根Ⅰ式及びⅡ式土器の提唱－」『千葉県文化財センター研究紀要8』
- 高橋 誠 1986「型式学的方法－貝殻沈線文系土器－ 変形菱

型文の伝統」『季刊考古学17号』

- 原田 昌幸 1986「撚糸文系土器終末期の諸問題」『物質文化46』
- 田中 英世 1986「千葉市芳賀輪遺跡出土の沈線文土器をめぐって－鹿島川流域の縄文時代遺跡（3）－」『貝塚博物館研究紀要13』
- 高橋 誠 1987「貝殻・沈線文系土器」『季刊考古学21』
- 井上 國雄・畠山 真一 1987「棚倉町丸山遺跡出土の無文土器－新資料の報告－」『福島考古』
- 石橋 宏克他1987『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－大栄地区（2）－』
- 原田 昌幸 1987「撚糸文系土器終末期の諸問題（Ⅱ）」『物質文化48』
- 領塚 正浩 1987「三戸式土器の再検討」『東京考古15』
- 粕谷 馥夫 1988「木の根式土器を伴う遺跡」『あし跡5』
- 原田 昌幸 1988「花輪台式土器論」『考古学雑誌74-1』
- 吉田 格 1988「縄文早期花輪台式文化－茨城県花輪台貝塚－」『考古学叢考（下）』
- 原川 雄二 1988「日計式土器について－特に押型文土器の文様とその変化－」『考古学叢考（下）』
- 原田 昌幸 1989「撚糸文系土器終末期の諸問題（Ⅲ）－大浦山式土器の検討－」『物質文化52』
- 原田 昌幸 1990「撚糸文系土器終末期の諸問題（Ⅳ）」『物質文化54』
- 恩田 勇 1991「沈線文土器群の成立と展開（1）－沈線文土器群前葉を中心として－」『神奈川考古27』
- 高橋 誠他 1992「講演会 早期沈線文系土器の成立と展開」『千葉県立風土記の丘年報16』
- 石橋 宏克他1992『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ（佐原地区4）』
- 岡本 東三 1992「埼玉県大原遺跡第3類土器をめぐって」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集2－』
- 領塚 正浩 1992「『三戸式』と『日計式』－縄文早期における地域間交渉の実態－」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集2－』
- 新井 端・宮崎 朝雄 1993「船川遺跡出土の縄文早期土器群について－所謂竹之内式土器共伴土器群の検討－」『埼玉考古30』
- 戸田 哲也 1995「撚糸文系土器終末期の一樣相－片瀬Ⅱa・b類土器を中心として－」『縄文時代6』
- 中野 拓大 1995「三戸式土器の成立と展開をめぐる試論」『みちのく発掘－菅原文也先生還暦記念論集』
- 井上 國雄 1996「久慈川流域における縄文時代早期無文・沈線文系土器群の様相」『論集しのぶ考古』

- 小暮 伸之 1996「縄文時代早期沈線文土器と押型文土器の変遷に関する一試論」『論集しのぶ考古』
- 中村 信博 1999「竹之内式土器の研究－文様の組み合わせパターンによる類型化と細分化の試み－」『唐澤考古18』
- 恩田 勇 1999「関東地方 早期中葉」『縄文時代10』
- 中村 信博 2003「撚糸文系最後の土器群」『利根川24・25』
- 川崎 保 2003「神村論文を読んで押型文土器の編年を考える－細久保式の成立と展開から－」『利根川24・25』
- 嶋村 篤 2009「花輪台Ⅰ式土器に関する基礎的研究（1）－印旛沼西岸遺跡群を中心とする検討－」『日々の考古学2』
- 川島 裕毅 2011『嶋越遺跡（第2地点）－物井2号線埋蔵文化財調査委託－』
- 岡本 東三 2017『縄文時代早期 押型文土器の広域編年研究』
- 嶋村 篤 2018「花輪台Ⅰ式石神段階の諸様相－千葉市小山遺跡出土土器の検討から－」『千葉縄文研究8』
- 相原 淳一 2020「日計式土器とその周辺－その年代と平行関係、及び層位的検討－」『九州縄文時代早期研究ノート6』
- 中村 信博 2022「船橋市取掛西貝塚における第Ⅲ期・Ⅳ期土器群の検討－天矢場式土器の動態から－」『栃木県考古学会誌43』
- 宮崎 朝雄 2023「撚糸文系土器終末期の無文化について」『煙草と縄文と考古学』
- 岡本 東三 2023「撚糸文土器と沈線文土器のあいだ－事実と解釈の狭間で－」『煙草と縄文と考古学』